

# 人の心に寄り添う 医療人になる

## 第1回

# 医療人としての感性を高める ～「感じる」を「信じる」、そして「考える」～ということ

昭和医療技術専門学校校長

さん だう まさる  
山藤 賢

「福島こども富士山プロジェクト」富士山からのご来光 昭和医療技術専門学校 香取尚美教員 撮影



### 山藤 賢(さんだう まさる)氏 プロフィール

1972年東京都生まれ。昭和大学医学部、同大学院医学研究科外科系整形外科学修了。医学博士。小学校から高校までは私立暁星学園サッカー部で活躍。東京都大会で優勝した他、全国大会にも出場した。現在は臨床検査技師教育に特化している昭和医療技術専門学校の校長として学生の育成にかかわる傍ら、現役の臨床医として患者とも向き合う。医療法人社団昭和育英会理事長、横浜つづきメディカルグループ代表として医療機関を複数経営。日本臨床検査学教育協議会においては、副理事長を務め、2014年には学会長の任も務めた。また、なでしこジャパンのチームドクター(オリンピック、ワールドカップなど帯同)、東京都サッカー協会医事委員長(現)を務めるなど、スポーツドクターとしても活躍している。また、2013年の著書「社会人になるということ」(幻冬舎 刊)は、丸善日本橋本店にて、週間ランキング1位(ビジネス部門)になるなど、その活躍は、医療界に留まらず、広いフィールドで注目されている。

### 編集室より[企画趣旨]

臨床検査技師をめぐる状況は、ここ数年で大きく変わっています。2014年度より、臨床検査技師に患者向けの臨床検査説明・相談実施に必要な知識および技術を習得させ、臨床検査技師のチーム医療参画の質的向上を図ることを目的として、一般社団法人日本臨床衛生検査技師会(日臨技)・各都道府県臨床衛生検査技師会主催にて「検査説明・相談ができる臨床検査技師育成講習会」が開催されています。

2015年4月から、「臨床検査技師等に関する法律施行令の一部改正」により、臨床検査技師が診療の補助として行っている採血に加え、検体採取が臨床検査技師に認められるようになりました。

また、「臨床検査技師法等に関する法律施行規則の一部改正」により、生理学的検査に新たに2項目加えられました。現在、日臨技では、新たな臨床検査技師の業務認証(臨床検査技師の病棟における業務)についても議論を進めており、臨床検査技師がチーム医療の一員として他の医療職や患者さんと接する機会は、今後ますます増えてくると考えられます。

本企画では、昭和医療技術専門学校で“人の心に寄り添える医療人”の育成を実践しながら、多くのフィールドでご活躍されている山藤先生に、実社会で働く臨床検査技師を対象として、時代の要請に応じられる臨床検査技師となるためのいくつかの要素についてご執筆・ご解説いただきます。

〒143-0024 東京都大田区中央3-22-14



### 【連載形式(予定)】

各界で著名な先生方への山藤先生のインタビュー(対談)にて、組織で働くこと、チーム内でのコミュニケーション、教育、臨床検査技師としての知識・技術の継承と向上、患者さんの心・命、自分の人生の役割などについてお話いただきます。山藤先生に先生方のお話を引き出していただきな

がら、それに関連したご自身のご経験・お考えなどもお話いただき、インタビュー(対談)を進めて参ります。医療業界以外の先生のお話に關しましては、インタビュー(対談)のなかで、あるいは総括として、そこから学ぶべき、医療人(新人・リーダー・教育者など)に必要な資質・素養などをご解説・ご執筆いただきます。 (「検査と技術」誌編集室 三由)

はじめまして、山藤です。今回、医学書院の「検査と技術」編集室の方から、「人の心に寄り添える医療人になること」をテーマとした原稿依頼をいただきました。リーダーといわれるような立場の方々から、新人、学生まで、幅広い方々を対象としてくださいとのリクエストをいただいております。しかし、私は、本来、人様に何かを教えたり与えたりできるような人間ではありませんし、それは大変おこがましいことだと自認しています。以前上梓した著書「社会人になるということ」でも冒頭のあいさつに書いたのですが、今回も、ぜひ、皆さんと一緒に勉強させていただきたいという気持ちで、対談形式にて執筆をお受けいたしました。これは、対談者も読者も私も、一緒に考え、「智慧」をめぐらせ、ともに成長していけるようなイメージです。私にとっても、これはチャレンジです。私自身の力不足から、至らない内容、表現も多々あるとは思いますが、ぜひ、皆さんとともに、この時間を共有していけたら幸いと思っています。そしてこの時間が、後の社会にとって少しでも有益なことにつながればいい、そういう思いを今、抱いています。

### 医療と教育の現場から

まずは、自己紹介も兼ねて、私がこのような

場で語らせていただく際に、そのよりどころとなる3つの立場を簡単にご説明させていただきます。私は、臨床検査技師教育に特化した昭和医療技術専門学校の学校長ですが、同時に複数の医療機関を抱えた医療法人の理事長として、また臨床の現場においては現役の医師として働いています。つまり、医療従事者を雇用する側の立場、送り出す教育者としての立場、一緒に現場で働く仲間としての立場、の3つの立場があります。このことが、学校長として、どのような臨床検査技師を育てるかを考える原点となっています。

雇用者として、医師として、私はどのような人と一緒に働きたいと思うのでしょうか。雇用者として採用面接を行う際、私たちの法人の医療機関では、学歴は一切問いません。どのような意欲で仕事に臨もうとしているのか、その人のよさは何なのか、私たちが掲げる「居心地のいい医療機関」を創造していくのにマッチしているか、を重視しています。医師としては、確かな知識と技術をもった、コミュニケーション能力に長けた、積極的で行動力のある医療従事者とともに働きたいと思います。だからこそ、教育の現場に立ち返った際には、この2つの視点からも私どもの学校にとって必要な教育は何かを考え、学生と向き合っています。医療現場で

の実践と、学生教育は密に結びついているのです。

## 連載の目的

それでは、この連載の目的について共有させてください。現在、社会が抱える問題点は数多くあります。医療の分野でも同様です。人口の少子高齢化の問題、医療費の増大と厳しい財政事情、社会格差の増大、ライフスタイルの変化、価値観の変化…。しかし今日、社会では、まさに大きなパラダイムシフトが起きようとしています。医療の世界でも同様です。病院から地域へ、治療から予防へ、医師単独からチーム医療へ…。それでは、その大きな変革のなかで臨床検査技師は、どのように活躍の場を「創っていく」のか、それが重要であります。医療界においても、これからは、ビッグデータとAI（人工知能）の時代といわれています。AIの発展で、これから必要でなくなる職業というのが発表され、一時期話題となりました。日本における臨床検査技師の仕事は、不要とはいわれなんでしょうか。そのような保証はありません。しかし、機械に任せっきりでは、そのような懸念は晴れません。私は、ビッグデータとAIは、今後、人類の発展上は、必要不可欠であるとは思っています。しかし、その危険性については、すごく危機感をもっている一人でもあります。では、私たち人間にしかできないことはなんでしょう。医療人としてはどうでしょう。私は、「人の心に寄り添うこと」は、私たち人間だからこそできること、いや、医療人として、しなければならないことではないかと思っています。

そういった意味から、私は、宮島喜文会長が中心となって、大きな苦勞を伴いながらも日臨

技が検体採取の法改正に踏み出したのは大いなる英断だと思っています。これからの臨床検査技師は、知識と技術のみに頼っている時代ではありません。患者さんの心に寄り添えなければならないのです。いや、本当はこれまでもそうだったに違いありません。優秀な臨床検査技師は、「人とつながること」ができる人物であるはずです。

知識と技術と述べましたが、最近では研究思考に走り、技術すらないがしろにされるような傾向もあります。昨今の教育現場においても、形だけの大学設置や、大学院への進学が優れた臨床検査技師を生むという論理を述べる教育者も多々いらっしゃいます。しかし、残念ながら、知識一辺倒を評価するだけの仕組みは、逆に時代遅れです。現場はそのような医療人を望んでいませんし、これからは、それだけでは淘汰されていきます。よく考えてみてください、知識や偏差値の高さ、学歴は、「患者さんを診れる」という指標にはなりません。誤解のないように、この話は、これまでに、数多くのご経験、結果を残され、道を切り開いてきた方々の実績を否定するつもりではありませんし、知識と技術はこれからも重要なものであります。しかし、これからの未来を拓く若者たち、そして臨床検査技師のあり方は、時代のパラダイムシフトに合わせて変化し続けなければなりません。

知識や技術を身に付けること。これは医療人として、本当に大切な必要なことです。しかし、知識や技術は、それを生かす術があって、初めて役に立つのです。そのために必要なこと。それは「智慧」をつけることです。知識と技術をどのような形で利用するのか。それが智慧です。相手が機械であろうと人であろうと、それは変わりません。そして、これは、新人で



あろうと優秀なベテランであろうと、同じく必要とされることなのです。もちろん、このようなことを偉そうに述べている私にも、これが正しいのかどうかという自信があるわけではありません。だからこそ、皆と一緒に、「考えていきたい」。そう思っています。

## 「感じる」を「信じる」、そして「考える」

それでは、私たちが生きていくうえで必要とされる智慧をつけるためには、何を学べばいいのでしょうか。学術的な医学、臨床検査学、現場での経験、その追及は本当に尊く必要なことでありますが、智慧をつけるために学ぶこと、それが何かというと、それこそがさまざまな経験と、その解釈であります。そのヒントは実は私たちの周りにたくさんあるのです。要は、その見方を変えさえすればいいのです。

私は、本法人の職員にも、学生にも、目に見えないモノを信じる力という話をします。ちょっと聞くと、あれっ、おかしいことを言っているなあ…、と思うような話かもしれません。しかし、表題にあるように、「人の心に寄り添うこと」は、目に見えるでしょうか。心は目に見えるでしょうか。見えないけれど、私たちはそれを信じています。医療人は、この感覚を研ぎ澄ますことが大事なのではないかと思っています。

普段、私たちは、考えて行動します。そうです、まず物事に対して、「考える」んです。これは大事なことです。あえて見方を変えて、入り方を変えてみてはどうでしょう。まず、「感じる」のです。それが自分の感性です。目には見えません。でも、その感じている自分自身を「信じる」のです。「感じたものを信じる」。その力が、現代社会を生きている私たち

にはだいぶ欠けてきているのではないのでしょうか。感じたものを信じて、そして、それに就いて考えてみる。このように見方を変えてみたとき、新しい自分が創造され、さまざまな経験から、幼いころから実は培ってきっていた感覚、感性が研ぎ澄まされ、それを信じることで自分が強くなれる。そんな気がします。

人の心に寄り添うには、自分が強くなければなりません。自分が弱ければ、相手を支えることができないからです。その強さは、力や権力、地位ではありません。その力は自分自身を信じることのできる強さです。そのために、自分の感性を磨き、感じる力を磨く必要があります。智慧をつける必要があります。

先ほど、智慧を磨いていくために必要なのは、さまざまな体験と解釈と述べました。この企画では、他業種の方も含め、ある種、達観ともいえるようなさまざまな体験をしている方を呼び寄せています。その話は、臨床検査の領域とは、一見、全くそぐわないように感じるかもしれません。でも、そうではないのです。どのような物事からも、自分自身の見方や解釈を変えることで、全て自分にとって必要なことになるのです。誰しもが同じポイントでもなければ、同じ言葉に響くわけでもありません。それぞれの思考やタイミングによっても違います。大切なのは、「自分自身」がどう感じるかということであり、そのことが、この連載に私が期待することでもあります。

## 医療人という存在

最後に、なぜ、どのような体験、物事からも、優れた医療人になるための素地が養えるかということに触れて、初回のタイトルの内容を整理したいと思います。



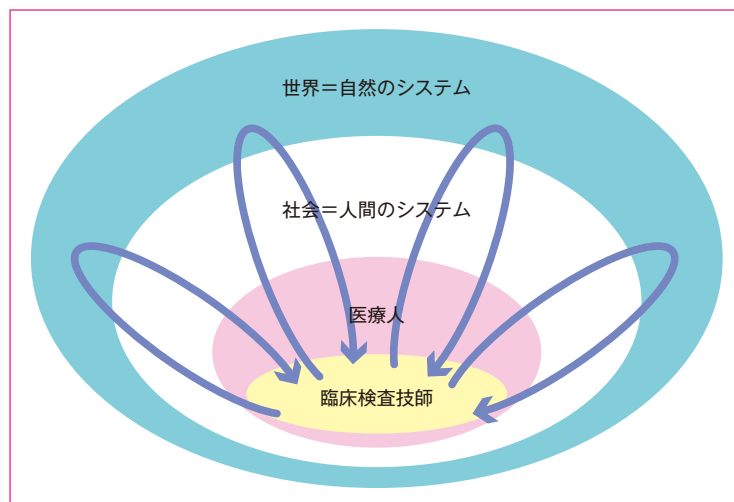


図 1 世界のシステム

図 1 を眺めてください。できるだけ、ぼーっと眺めてもらえるといいかもしれません。

臨床検査技師という枠は、医療人という枠に収まっています。その外の枠は、社会(人間のシステム)です。そしてそのさらに外には、世界(自然、宇宙)という大きなくりがあります。この仕組みの中では、臨床検査技師という枠の中での話は、非常に小さなものになってしまいます。それは本来、大きな世界という枠の一部でしかないからです。その臨床検査技師としての感性を高めるためにはどうしたらいいのか。この図の枠を飛び越えて感性を磨く必要があるのです。そして、その枠を飛び越えて触れた領域から、また枠の中に戻ってくればいいのです。少し感覚的な話で難しいでしょうか。例えば、自然に触れたり、山に登ったり、海に行ったり、空気がおいしいと感じたり、そのようなとき、私たちは、誰もが、自分の生命のエネルギーが高まるのを感じ、心地よさを感じます。それは、大きな世界に触れているからであ

り、そのエネルギーは自分のテリトリーに戻っても、体験と成長として残ります。私たちは、医療人としての枠を広げ、外の世界に手を伸ばすことで、医療人としての感覚を磨くことができ、またそのような医療人が、外に向かって大きなものを発信していくことにつながります。

そして、その存在は、人とつながり、社会とつながり、世界とつながることができるのです。目の前の人の心に寄り添うことができるのです。そして、誰もが、その可能性をもっていて、日頃から当たり前のように、実は、行動していることなのです。

## おわりに

「人の心に寄り添う医療人になる」の初回のお話で、読者の皆さんと少し近づけましたでしょうか。初回には書ききれなかった、皆さんと一緒に分かち合いたいお話はまだたくさんあります。紙面が足りない(笑)。そのあたりは、またおいおい連載のなかで、皆さんとのキャッチボールのなかで、シェアしていきま



しょう。

次回、記念すべき第1回目の対談は、皆さんがよくご存じの、なでしこジャパン(女子サッカー日本代表チーム)の佐々木則夫監督です。佐々木監督は、アジアでもチャンピオンになったことがないチームを、世界ナンバーワンへと導きました。監督就任時の状況を考えれば、誰もが、想像もしえなかったことでした。しかし、その想像や既成概念の枠を超え、自分を信じ、仲間を信じることで、この偉業は達成されました。そこには、佐々木監督の生きざま、思考、全てが結びついています。なでしこジャパンでの体験、体感は、医療の世界とは一見関係ないように思えますが、一人の人としてのあり方、チームマネジメントのあり方を考えたとき、ここから大きなヒントをもらうことができます。佐々木監督は、私が長らくなでしこジャ

パンのチームドクターを務めてきた縁もあり、特別に今回の対談を許可してくださいました。これからも、佐々木監督のような「生きていく力・財産」をもった「達人」たちを、医療業界以外からも何人か本連載のゲストとしてお招きし、医療との橋渡しをしていくことが、私の役目と考えています。

人は、「変わることができる生き物」です。この連載は、自分自身のあり方を自ら考え、そして実践していくための道具の一つです。さまざまな業界のさまざまな人の言葉から、何か、自分自身のなかに響くような体感をしてもらえたら幸いです。私と皆さんの間での心の「共振」。これからしばらく、お付き合いのほど、どうぞよろしくお願いいたします。